

豊山学報・第66号
弘法大師御生誕千二百五十年
記念特別号抜刷
令和5年3月発行
真言宗豊山派総合研究院

Muṇḍakopaniṣadbhāṣya における Śirovrata と *ekarṣi* について

田 中 純 也

Muṇḍakopaniṣadbhāṣya における Śirovrata と *ekarṣi* について

田 中 純 也

1. はじめに

Muṇḍakopaniṣad (= MuU) は Atharvaveda に帰せられる Upaniṣad の 1 つであるが、その特徴的な内容から、祭式批判の絶頂にあるテキストとして取り上げられることが多い¹。一方で、同テキストには祭式を前提とする記述も確認される²。Muṇḍakopaniṣad のエピローグに該当する MuU.3.2.10 もその 1 つである。

MuU.3.2.10

tad etad ṛcābhyuktam

*kriyāvantaḥ śrotriyā brahmaniṣṭhāḥ svayaṃ juhvata ekarṣim
śraddhayantaḥ /*

*teṣāṃ evaitāṃ brahmavidyāṃ vadeta śirovratam vidhivad yais tu
cīrṇam //*

そういうこれは、詩節によって、次のように言われている。

祭式行為を行う者たち、Veda に精通した者たち、Brahman に専心する者たち、信仰を有する者たちは、自ら／自身を ekarṣi に [自らのために] 献じる。

彼らにのみ、この Brahmavidyā を語るべきである。Śirovrata が規則通りに為されたならば。

MuU.3.2.10 は「祭式行為を行う」「Veda に精通した」「Brahman に専心する」「信

Muṇḍakopaniṣadbhāṣya における Śirovrata と *ekarṣi* について (田中純)

仰を有する³」*「ekarṣi* に献じる」といった者が、Śirovrata を完了した場合にのみ、その者に最高の知識である Brahavidyā を語るべきであると説いている。この記述は秘義を授ける対象者を示しているため、同テキストの態度を決定付けるものであると言えよう。しかし、この Śirovrata という *vrata* 誓戒の内容は不明確であり⁴、Muṇḍakopaniṣad の文脈における *ekarṣi* の素性も明らかではない。

これに対して、Śaṅkara (8世紀頃) に帰せられる註釈書 Muṇḍakopaniṣadbhāṣya (= MuUBh) は以下のように解釈している (以下、太字、ゴシック体は *pratika*)。

MuUBh.3.2.10

athedāṇīm brahmavidyāsaṃpradānavidhyupapradarśanenopasaṃhāraḥ kriyate. tad etat vidyāsaṃpradānavidhānam ṛcā mantreṇābhyuktaṃ abhiprakāśitam. kriyāvantaḥ yathoktakarmānuṣṭhānayuktāḥ. śrotriyāḥ brahmaniṣṭhāḥ aparasmin brahmaṇy abhiyuktāḥ paraṃ brahma bubhutsavaḥ. svayam ekarṣim ekarṣināmānam agnim juhvate juhvati. śraddhayantaḥ śraddadhānāḥ santaḥ ye teṣām eva saṃskṛtātmanām pātrabhūtānām etāṃ brahmavidyāṃ vadeta brūyāt. śirovrataṃ śirasy agnidhāranalakṣaṇam. yathā ātharvaṇānām vedavratam prasiddham. yais tu yaiū ca tat cīrṇam vidhivat yathāvidhānam teṣām eva vadeta.

そこで今、Brahmavidyā の授与に関する教令を示すことによって、[物語の] 結びが為された。そういうこれが、つまり知識の授与の方法が、詩節によって、つまり *mantra* によって、次のように言われている、つまり次のように明示されている。祭式行為を行う者たちとは、先述の祭式行為の実践に携わる者たちである。Veda に精通して、Brahman に専心する者たちとは、Apara Brahman に専念して、Para Brahman を知ろうと欲する者たちである。自ら *ekarṣi* に、つまり *ekarṣi* という名の Agni に 献じる、つまり献じる。信仰を有す者たち、つまり信仰を保持している者たち、そういう浄化の儀式を受けて、享受するに適した者たちにのみ、この Brahavidyā を

語るべきである、つまり伝えるべきである。Śirovrataとは、頭において Agni を保持することを特徴とするものである。Atharvaveda に属するものたちの Vedavrata として周知のように、**しかし**、つまりそして、そのような者たちによって (*yais*)、それ (Śirovrata) が**為されたならば、規則通りに**、つまり規則通りに、彼らにのみ語るべきである。

Muṇḍakopaniṣadbhāṣya は Śirovrata を *śirasy agnidhāraṇalakṣaṇam* 「頭において Agni を保持することを特徴とするもの」、*ekarṣi* を *ekarṣināmānam agnim* 「*ekarṣi* という名の Agni」と註釈している⁵。ここでは、少なくとも同テキストがそれらを共に Agni と関連付け、Śirovrata を Atharvaveda に属する Vedavrata として解釈していることは理解される。

しかし、従来この *vrata* は「剃髪」等と翻訳される Muṇḍaka というタイトルを根拠に「剃髪の誓戒」として理解されてきた経緯があり⁶、Muṇḍakopaniṣadbhāṣya の *śirasy agnidhāraṇalakṣaṇam* はその不明瞭さから、これまでほとんど無視されてきた。また、*ekarṣi* の註釈についても同様に、詳細な説明はなされてこなかった。

そこで、本稿では、不確定な要素を多く含む MuU.3.2.10 の解明に向け、未だ十分な検討がなされていない Muṇḍakopaniṣadbhāṣya の Śirovrata と *ekarṣi* に関する解釈の究明を目的とする。

2. Śirovrata について

Śirovrata の語は Muṇḍakopaniṣadbhāṣya 以降のテキストで確認されることが多く、それ以前のテキストでは用例自体がほとんど見られない⁷。そのような状況で、この語は Muṇḍakopaniṣad と成立年代がある程度近いとされる⁸ Vāsiṣṭhadharmaśāstra (= VāsDhŚ) において明確に確認される。

VāsDhŚ.25.2

Muṇḍakopaniṣadbhāṣya における Śirovrata と *ekarṣi* について (田中純)

*āhitāgner vinitasya vṛddhasya viduṣo 'pi vā /
rahasyoktaṃ pyāyaścittaṃ pūrvoktaṃ itare janāḥ //*

祭火を設置した者, 教育を受けた者, 年を重ねた者, あるいは学者に関する, Prāyaścitta 贖罪法が秘密 [の章] で説かれる. 他の人々は先述の [贖罪法を行う].

VāsDhŚ.26.12

*jāpināṃ homināṃ caiva dhyāyināṃ tīrthavāsināṃ /
na parivasanti pāpāni ye ca snātāḥ śirovrataiḥ //*

他ならぬ低唱して献じる者たち, 瞑想する者たち, 聖地に住まう者たち, そして, Śirovrata たちによって沐浴者となった者たち, [彼らの] 罪たちは留まらない.

VāsDhŚ.25.2 が指示する通り, VāsDhŚ.25-27 は Veda をすでに学習した者に向けた Prāyaścitta に関するセクションであり, VāsDhŚ.26.12 においては Śirovrata によって沐浴者となる者の存在が想定されている. このことから, 少なくともここでの文脈では, 通常の Veda 学生でない者が同 *vrata* を遵守することが意図されていると言えよう⁹.

一方, Muṇḍakopaniṣad も「すでに Veda を学習した家長が師から新しい秘義を教わる」という物語になっているため¹⁰, VāsDhŚ.26.12 と MuU.3.2.10 で確認される両 *vrata* は, 教育を受けた家長に遵守される点では共通することになる¹¹. しかし, 両テキストを比較検討しても, Śirovrata の具体的な内容は不明なままである. 通常, バラモン教で *muṇḍa* 剃髪は避けられることが多いものの¹², 先述の通り Muṇḍaka というタイトルとの関係も無視できないため, 現状 Muṇḍakopaniṣad における Śirovrata については「剃髪の誓戒」と理解する他ないと思われる.

仮に, Śirovrata が「剃髪」, すなわち *śikhā* 頭頂部の毛束をも剃る行為を指すならば, *sattra* 祭との関係から¹³, Taittirīyasaṃhitā (= TS) 7.4.9 に見られ

るような自己犠牲を背景としているとも考えられよう。その場合、MuU.3.2.10の *svayaṃ juhvat[e]* も「自身を献じる」と理解されることになるかもしれない。

TS.7.4.9

suvargāṃ vā eté lokāṃ yanti yé sattrám upayánti. abhīndhata evá dīkṣābhir ātmānaṃ śrapayanta upasádbhiḥ. dvābhyāṃ lómāva dyanti dvābhyāṃ tvácam dvābhyāṃ ásṛt dvābhyāṃ māmśám dvābhyāṃ ásthi dvābhyāṃ majjānam. ātmádakṣiṇaṃ vái sattrám. ātmānam evá dáksīṇāṃ nūtvā suvargāṃ lokāṃ yanti. śikhāṃ ánu prá vapante řddhyai. átho rághiyāmsaḥ suvargāṃ lokāṃ ayāméti.

sattrá 祭に近づく者たち、この者たちは天界へ赴くのだ。彼らは潔斎たちによって自身をまさに火で囲み、*upasád* たちによって調理させる。彼らは2つによって毛を切り取り、2つによって皮膚を、2つによって血を、2つによって肉を、2つによって骨を、2つによって骨髄を [切り取る]。 *sattrá* 祭は自己犠牲なのだ。他ならぬ自身を布施として導き、彼らは天界へ赴く。彼らは繁栄のために *śikhā* を剃る。そこで、「より軽い我々は天界へ行きたい」と [唱えて]。

いずれにせよ、実際に Śirovrata の語が確認される Vāsiṣṭhadharmaśāstra においても、*śirasy agnidhāraṇalakṣaṇam* という解釈の根拠が確認されないため、この註釈は Muṇḍakopaniṣadbhāṣya 独自の理解に基づくものであると考えて良いだろう。

3. *ekarṣi* について

Muṇḍakopaniṣadbhāṣya の註釈する *śirasy agnidhāraṇalakṣaṇam* の検討に先立ち、同テキストが同様に Agni と関連付けて註釈する *ekarṣi* について、まずはその用例を確認したい。

Muṇḍakopaniṣadbhāṣya における Śirovrata と *ekarṣi* について (田中純)

ekarṣi は、通例 ‘lone seer’ や「唯一の聖仙」などと翻訳されることが多いものの、その素性は明確でない。そのような *ekarṣi* が確認される主なテキストは Atharvaveda である。

Atharvaveda (Śaunaka) (= AVŚ) 8.9.25

kó nú gáuh ká ekarṣiḥ kím u dhāma kã āśiṣaḥ /
yakṣám prthivyām ekavṛd ekartúḥ katamó nú sáḥ //

誰が牛なのだ。誰が *ekarṣi* なのか。何が住居なのだ。誰が祈りたちなのか。大地における霊、単一なもの、唯一の時間、彼はどれなのだ。

AVŚ.8.9.26

éko gáur éka ekarṣír ékaṃ dhāmaikadhāśiṣaḥ /
yakṣám prthivyām ekavṛd ekartúr nāti ricyate //

1つは牛である。1つは *ekarṣi* である。1つは住居である。個々の祈りたちである。

大地における霊、単一なもの、唯一の時間は超過しない。

AVŚ.10.7.14

yātra ṛṣayaḥ prathamajā ṛcaḥ sāma yájur mahi /
ekarṣír yásminn ārpitaḥ skambháṃ tám //

原初の聖仙たち、詩節たち、歌詠たち、祭詞たち、大地があるところ。

ekarṣi が固定されたところ。その *skambhá* は [どれが本当に彼なのか、お前は語れ]。

AVŚ.8.9 は *virāj* を、AVŚ.10.7 は *skambhá* を讃える歌である。Mitchiner(1982, 306) は、それらの記述において、*ekarṣi* が宇宙的な牛などと同一視され、天地に連なる *skambhá* に固定されたものであると指摘している¹⁴。

Muṇḍakopaniṣad と時代を前後する他の Upaniṣad については、Bṛhadāraṇyako-

paniṣad (= BĀU), Īsopaniṣad (= ĪsU), および Praśnopaniṣad (= PU) において *ekarṣi* の語が確認される。

BĀU.5.15.1

hiraṇmayena pātreṇa satyasyāpihitam mukham /

tat tvaṃ pūṣann apāvṛṇu satyadharmāya dhṣṭaye // (= ĪsU.15)

pūṣann ekarṣe yama sūrya prājāpatya vyūha raśmīn samūha tejaḥ /

*yat te rūpaṃ kalāṇatamaṃ tat te paśyāmi yo 'sāv asau puruṣaḥ so 'ham
asmi // (= ĪsU.16)*

vāyur anilam amṛtam athedaṃ bhasmāntam śarīram /

om krato smara kṛtam smara krato smara kṛtam smara // (= ĪsU.17)

agne naya supathā rāye asmān viśvāni deva vayunāni vidvān /

yuyodhy asmaj juhurāṇam eno bhūyiṣṭhām te namauktiṃ vidhema // (= ĪsU.18)

黄金の器¹⁵で真実の顔が隠されている。

それをお前は、Pūṣan よ。取り払え。真実を法とする者のために、見るために。
Pūṣan よ。 ekarṣi よ。 Yama よ。 Sūrya よ。 Prājāpatya よ。 光線たちを撒け。
熱をまとめよ。

お前の最も輝かしい姿、お前のそれを私は見る。ああいうあの Puruṣa、私は彼である。

息は風であり、不死である。ここで、この身体は灰である。

オーム。意図よ。思い出せ。過ぎたことを思い出せ。意図よ。思い出せ。
過ぎたことを思い出せ。

Agni よ。我々を良き道によって、富のために、お前は導け。神よ。一切の知者たちを知っている者は。

我々から、曲がった罪を非常に遠ざけよ。お前に敬意を表そう。

PU.2.11

Muṇḍakopaniṣadbhāṣya における Śirovrata と *ekarṣi* について (田中純)

vṛātyas tvaṃ prāṇaikarṣir attā viśvasya satpatih /
vayam ādyasya dātārah pitā tvaṃ mātariśva naḥ //

Prāṇa よ、お前は Vṛātya であり、*ekarṣi* であり、すべての食者であり、良き主である。

我々は食物の提供者であり、お前は我々の父である。Mātariśva¹⁶ よ。

ekarṣi は、BĀU.5.15.1 (ĪsU.15-18) において太陽や Agni 祭火と同一視、あるいはそれらの属性を持つものとして描かれている。また、Prāṇa を讃える詩節の一部である PU.2.11 においては、Prāṇa とも同一視されている。加えて、BĀU.2.6.3; 4.6.3 では、系譜の中の 1 人として *Ekarṣi* が名を連ねている。

以上のように、*ekarṣi* は天地に連なる神話的な存在や、太陽と祭火、あるいは地上で身体を維持する Prāṇa とも同一視され、場合によっては聖仙の 1 人としても描かれる存在なのである¹⁷。そのため、MuU.3.2.10 における *ekarṣi* を論じる際は、時代の近い上記のテキストに依拠せざるを得ず、Olivelle (1998, 636) のように、PU.2.11 に基づく Prāṇa や ĪsU.16 に基づく Pūṣan との同一性を起点にするしかなかったという状況にある¹⁸。

4. Prāṇāgnihotropiṣad における *ekarṣi*

ekarṣi と Prāṇa の同一性に基づいて、Prāṇāgnihotra との関係が言及されることもある¹⁹。Prāṇāgnihotra とは、焼供を祭火に捧げる通常の Agnihotra とは異なり、自身の 5 つの生体諸機能／*prāṇa* たちを祭火とみなして、それらに食物を捧げる祭式行為である²⁰。

ここで注目したいのは Prāṇāgnihotra の実践を説く Prāṇāgnihotropiṣad (= PrāṇU)²¹ である。Atharvaveda に帰せられる²² 同テキストにおいては、Muṇḍakopaniṣadbhāṣya の註釈と類似する *ekarṣi* と Agni、そして頭の関係がまとめ確認される。

PrāṇU.1-3

*athātaḥ sarvopaniṣatsāraṃ saṃsārajñānātītam annasūktam śarīrayajñam
vyākhyāsyāmaḥ. (1-2) asmin eva puruṣaḥ śarīre vināpy agnihotreṇa vināpi
sāṃkhyayogena saṃsāravimuktir bhavatīti. (3)*

(1-2) そこで、これから、すべての Upaniṣad の真髄であり、輪廻が知恵で渡られる、食物への讃歌であるところの、身体の祭式を我々は説明する。(3) 「人は他ならぬこの身体で、Agnihotra がなくても、Sāṃkhya の Yoga がなくても、輪廻の解放が可能である」と。

PrāṇU.18-19

*iti kaniṣṭhikāṅgulyāṅguṣṭhena ca prāṇe juhoty anāmikayāpāne
madhyamikayā vyāne pradeṣinyā samāne sarvabhir udāne. (18) tūṣṇīm
ekāṃ ekarsau juhoti dve āhavanīya ekāṃ dakṣiṇāgnāv ekāṃ gārhapatya
ekāṃ sarvaprāyaścittīye²³. (19)*

(18) 以上のように [唱えて]、小指と大指によって *prāṇa* に [食物を?] 献じる。無名指 [と大指] によって *apāna* に [献じる]。中指 [と大指] によって *vyāna* に [献じる]。頭指 [と大指] によって *samāna* に [献じる]。すべて [の指] によって *udāna* に [献じる]。(19) 黙ったまま、1つ [の食物?] を *ekarṣi* に献じる。2つを *Āhavanīya* に [献じる]。1つを *Dakṣiṇāgni* に [献じる]。1つを *Gārhapatya* に [献じる]。1つを *Sarvaprāyaścittīya* に [献じる]。

PrāṇU.27-32

*catvāro 'gnayas te kiṃnāmadheyāḥ. (27) tatra sūryo 'gnir nāma
sūryamaṇḍalākṛtiḥ sahasraraśmibhiḥ parivṛta ekarṣir bhūtvā mūrdhani
tiṣṭhati. (28) daśanāgnir nāma caturākṣtir āhavanīyo bhūtvā mukhe
tiṣṭhati. (29) śarīro 'gnir nāma jarāpraṇudo havir avaskandaty
ardhacandrāktir dakṣiṇāgnir bhūtvā hṛdaye tiṣṭhati. (30) koṣṭhāgnir*

nāmāsītapītalīḍhakhādītāni samyag vyaṣṭyāṃ śrapayitvā gārhapatyo bhūtvā nābhyam tiṣṭhati. (31) *prāyaścittīyas tv adhasṭāt striyas tisraḥ himāṃsuprabhābhiḥ prajānanakarmā.* (32)

(27)4つの Agni たち、それらはどんな名前なのか。(28) その場所 (身体) で、Sūrya Agni という名で、太陽のような円形で、千の光線たちに囲まれて、*ekarṣi* となって、頭において安立する。(29)Daśanāgni²⁴ (齒) という名で、四角形の Āhavanīya となって、口において安立する。(30)Śarīra Agni という名で、消化を促進し、供物を押し下げて、半円形の Dakṣiṇāgni となって、心臓において安立する。(31)Koṣṭhāgni (胃) という名で、食べて飲んで舐めて嚙まれたものたちをすべて1か所で調理して、[円形の] Gārhapatya となって、へそにおいて安立する。(32)そして、Sarvāprayaścittīya は下で、3人の妻たちとして、月の光によって、出産を為す。

Prāṇ.U.18-19; 27-32 では、身体各箇所に各祭火に見立て、それらの祭火に食物を献じることが記されており、*ekarṣi* は3祭火に連なるものとして描かれている。さらに、「*ekarṣi* となって *mūrdhan* 頭において安立する」という記述も確認される。したがって、Muṇḍakopaniṣadbhāṣya は、ここで説かれているような *ekarṣi* に食物を献じる Prāṇāgnihotra を意図して、*ekarṣi* を *ekarṣināmānam agnim*, Śirovrata を *śirasy agnidhāraṇalakṣaṇam* と解釈したと考えることができよう²⁵。

最後に、Muṇḍakopaniṣadbhāṣya の解釈の背景を探ってみたい。

同テキストは行為を否定し、Brahmavidyā という知識こそが最高の手段であるとする立場に基づくテキストである²⁶。一方、Muṇḍakopaniṣad は「家長が師のもとでの修行生活に止住して秘義を教わる」という文脈を有しており、先述の通り「行為を有する者」も秘義の対象者として描かれていた。行為を否定する Muṇḍakopaniṣadbhāṣya にとってこの理解は許容し難く、何とかして「行為を有さない者」を秘義の対象者として解釈し直す必要があったはずである。

そこで、Muṇḍakopaniṣadbhāṣya は *ekarṣi* を Prāṇāgnihotra の文脈で用いら

れる Agni, そして Śirovrata を Prāṇāgnihotra の実践 (あるいは準備) と理解して、「*ekarṣi* に献じること」と「Śirovrata の遵守」を同じ話題に集約した、言い換えると、祭式行為者が前提にあったとしても、「内的な祭式行為」である Prāṇāgnihotra を経ることで、最終的に祭火に携わらない者に Brahmavidyā が語られることになると解釈したのだと考えられる²⁷.

5. まとめ

依然, MuU.3.2.10 における Śirovrata と *ekarṣi* の具体的な内容や、それらの関係性については不明なままである。しかし, Muṇḍakopaniṣadbhāṣya が, Prāṇāgnihotropariṣad に見られるような *ekarṣi* と Agni, そして頭の関係に基づき, Śirovrata を独自に *sirasy agnihārāṇalakṣaṇam* と解釈していた可能性を示すことができた。

Bodewitz (1973, 213) が「厳密に言えば, Prāṇāgnihotra という用語は, 食物を伴う明確な祭式のみを指すが, 後世では, 象徴的, 精神的な思索に適用されることもあり, その一部は, Agnihotra にも Prāṇa への食物の献供にも関係していない」と指摘しているように, 本来 Prāṇāgnihotra は祭式の手順や供物が明確に規定されている実際の祭式行為であったが, 後代にはその理解にも変化が生じてきたとされている²⁸。したがって, Śāṅkara に帰せられる Chāndogyopariṣadbhāṣya 5.18.2 が食事の際の Agnihotra と瞑想を関連付けて註釈するのと同様に²⁹, Muṇḍakopaniṣadbhāṣya も, そのような精神的な祭式行為を意図して, MuU.3.2.10 と「祭式行為の放棄」を結びつけたということは十分に考えられる。

一方で, 註釈書が以上のような解釈をしていたとしても, 実際には Muṇḍakopariṣad や Praśnopariṣad がどこまで Prāṇāgnihotra を意図していたのかは明確でない³⁰。そのため, 今後は両テキストと Prāṇāgnihotra の関係についても精査する必要があるだろう。

一次資料

- AVPariś *The Pariśiṣṭas of the Atharvaveda*. Vol.1. Edited by George Melville Bolling & Julius Von Negelein. Part II. Leipzig: Harrassowitz, 1910.
- AVŚ *Atharva Veda Sanhita*. Herausgegeben von R. Roth und W. D. Whitney. Dritte, unveränderte Auflage (nach der Max Lindenau besorgten zweiten Auflage) Bonn: Fred Dümmmlers, 1966. (2nd. ed. Berlin 1924).
- BĀU *Eighteen Principal Upaniṣads*. Vol. I (Upaniṣadic Text with Paralles from extant Vedic Literature, Exegetical and Grammatical Notes). Edited by V. P. Limaye and R. D. Vadekar. Poona: Vaidika Saṃśodhana Maṇḍala, 1958.
- MuU See BĀU.
- MuUBh *Complete Works of Sri Sankaracharya in the original Sanskrit*. Vol. VIII. Commentaries on the Upanishads. Chennai: Samata Books, 1999.
- PrāṇU *La Mahā Nārāyaṇa Upaniṣad: Édition critique, avec une traduction française, une étude, des notes et, en annexe, La Prāṇāgnihotra Upaniṣad*. Jean Varenne. Publications de l'Institut de Civilisation Indienne, Série in-8°, fasc. 11 and 13. Paris: E. de Boccard, 1960. (2e éd. Paris: Collège de France, Institut de Civilisation Indienne, 1986).
- PU See BĀU.
- PUBh *Ānandagiriviracitaṭikāsaṃvalitaśāṃkarabhāṣyasametā, tathā Śaṃkarānandaviracitā Praśnopaniṣaddīpikā ca*. Vināyaka Gaṇeśa Āpaṭe. Caturthīyam Aṅkanāvṛttiḥ. Ānandāśrama Saṃskṛta Granthāvaliḥ, Granthāṅkaḥ 8 (Ānandāśrama Sanskrit Series 8), 1922.
- TS *Die Taittirīya-Saṃhitā*. Herausgegeben von Albrecht Weber. 2. Kāṇḍa V—VII. Indische Studien, 12. Leipzig: F. A. Brockhaus, 1872.
- VāsDhŚ *Śrī Vāsiṣṭha Dharma Śāstram. Aphorisms on the Sacred Law of the Āryas, as taught in the school of Vasishṭha*. Edited by Alois Anton Führer. Bombay: Government Central Book Depôt, 1883.

二次資料

- Abhyankar, Kashinath Vasudev. and Shukla, J. M. 1961. *A Dictionary of Sanskrit Grammar*. Baroda: Oriental Institute.
- Bloomfield, Maurice. 1906. *A Vedic Concordance*. Harvard Oriental Series 10. Cambridge, Massachusetts: Harvard University.
- Bodewitz, H. W. 1973. *Jaiminīya Brāhmaṇa I, 1–65: Translation and Commentary with a Study Agnihotra and Prāṇāgnihotra*. London: Brill.
- Bronkhorst, Johannes. 2007a. *Greater Magadha: Studies in the Culture of Early India*. Leiden/Boston: Brill.
- Bühler, Georg, trans. 1882. *The Sacred Laws of the Āryas: As Taught in the School of Āpastambha, Gautama, Vāsishtha, and Baudhāyana*. Part II. Oxford: Clarendon Press.
- Deussen, Paul, trans. 1897. *Sechzig Upanishad's des Veda*. Leipzig: F. A. Brockhaus. English trans. by V. M. Bedekar and G. B. Palsule. *Sixty Upanisads of the Veda*. 2 vols. Delhi: Motilal Banarsidass, 1980.
- . 1906. *The Philosophy of the Upanishads*. New York: Dover Publications.
- Gupta, Som. Raj. 1995. *The Word Speaks to the Fausian Man*. Vol. 2. Delhi: Motilal Banarsidass.
- Hauer, J. W. 1927. *Der Vrātya: Untersuchungen über die nichtbrahmanische Religion Altindiens*. Stuttgart: Kohlhammer.
- Lalye, P. G. 1973. *Studies in Devi Bhāgavata*. Bombay: Popular Prakashan.
- Mitchiner, John E. 1982. *Traditions of the Seven Ṛṣis*. Delhi: Motilal Banarsidass.
- Olivelle, Patrick. 1998. *The Early Upaniṣads: Annotated Text and Translation*. New York: Oxford University Press.
- , trans. 1999. *Dharmasūtras: The Law Codes of Āpastamba, Gautama, Baudhāyana, and Vasiṣṭha*. New York: Oxford University Press.
- . 2010. "Upaniṣads and Āraṇyakas." *Brill's Encyclopedia of Hinduism*. Volume II. edited by Knut A. Jacobsen. 41–55.
- Rocher, Ludo. 1986. *The Purāṇas*. A History of Indian Literature. Edited by Jan Gonda. Vol. II. Fasc. 3. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

- Srinivasan, Doris. 1973. "Samdhya: Myth and Ritual." *Indo-Iranian Journal*. 15 (3): 161-178.
- Staal, J. F. 1961. *Advaita and Neoplatonism: A Critical Study in Comparative Philosophy*. Madras: University of Madras.
- Vijnananda, Swami, trans. 1922. *The Srimad Devi Bhagavatam*. The Sacred Books of the Hindus. Vol. XXVI. Part. 3. Allahabad: Sudhindra Nath Vasu.
- 伊澤敦子. 1996. 「prāṇāgnihotra と ātmayajña」. 『印度學佛教學研究』. 44 (2): (39)-(41).
- 阪本 (後藤) 純子. 1994. 「髪と鬚」. 『日本仏教学会年報』. 59: 77-90.
- . 2014. 「出家と髪・鬚の除去—ジャイナ教と仏教との対比—」. 『奥田聖應先生 頌寿記念インド学仏教学論集』. 334-349.
- 田中純也. 2019. 「Muṇḍakopaniṣad における aparā vidyā について」. 『大正大学大学院研究論集』. 44: 84-71.

註

- 1 Bronkhorst 2007, 300, Olivelle 2010, 52-53 参照.
- 2 Muṇḍakopaniṣad における祭式行為の位置付けについては, 田中 2019 参照.
- 3 あるいは「*ekarṣi* を信じる」.
- 4 Caraṇavyūha に 該 当 す る Atharvavedapariśiṣṭa (= AVPariś) 49 では Muṇḍakopaniṣad と共に列挙されているが, 詳細についての記載はない. AVPariś. 49.4.10 : *tatra pañcadaśopaniṣado bhavanti / muṇḍakā / praśnakā / brahmavidyā / kṣurikā / cūlikā / atharvaśiraḥ / atharvaśikhā / garbhopaniṣat / mahopaniṣat / brahmopaniṣat / prāṇāgnihotram / māṇḍūkyam / vaitathyam / advaitam / alātaśāntīś ceti //* AVPariś.49.4.11 : *tatra brahmavede 'ṣṭādaśa vratāni cariṣyan sāvitṛvratam / vedavratam / vedottaravratam / mailavratam / mailottaravratam / mṛgāravratam / rohitavratam / viśāsahivratam / yamavratam / śāntivratam / śikhivratam / gaṇavratam / śirovratam / śikhāvratam / marudvratam / adhvratam / aṅgirovratam / pāśupatavrataṃ caret //*
- 5 Śāṅkara に帰せられる Praśnopaniṣadbhāṣya (= PUBh) 2.11 も *ekarṣi* を Agni と

註釈している (*ātharvaṇānām prasiddha ekarṣināmāgñiḥ*).

- 6 Deussen 1906, 73 参照.
- 7 Śirovrata は Devihāgavatapurāṇa 11.9 でも 確 認 され, Vijnananda (1922, 1076ff.) が “the Śirovrata (*i. e.* vow of the head; *i. e.* vow to apply ashes on the forehead).” と記述しているが, 同テキストの成立はおおよそ 10–11 世紀とされているため (Rocher 1986, 172, Lalye 1973, 102ff. 参照), Muṇḍakopaniṣadbhāṣya の根拠にはならないと思われる。ちなみに, この「額に灰を塗る誓戒」からは, Saṃdhyā における *bhasmadhāraṇa* が想起される (Srinivasan 1973, 162 参照).
- 8 Vāsiṣṭhadharmaśāstra を含むいくつかの法典の成立年代については, Olivelle 1999, xxv–xxxiv 参照.
- 9 Bühler (1882, 128) は VāsDhŚ.26.12 における Śirovrata に関して, “After performing the vows (called) Siras,’ *i. e.* those which are known in the Upanishads, which are called agnidhāraṇa and so forth, and whose head (siras) consists in the worship of the teacher.—*Krishnapandita. Mundaka Upanishad III, 2, 10.*” という註釈書の解釈を紹介している。ここでも *agnidhāraṇa* が言及されているが, Monier によると, この *Kṛṣṇapaṇḍita* という註釈者は 15 世紀の作品である *Prakriyākaumudī* (Abhyankar and Shukla 1961, 260 参照) の学者であるため, おそらく彼の解釈は Muṇḍakopaniṣadbhāṣya に依拠するものと思われる.
- 10 Muṇḍakopaniṣad における入門の文脈についても, 田中 2019 参照.
- 11 Vāsiṣṭhadharmaśāstra の Śirovrata について, Olivelle (1999, 397) は “Head’ vow: the meaning is unclear. The same expression occurs in MuU 3.2.10 and may refer to some type of head-shaving connected with studying a particularly sacred text.” と指摘している.
- 12 *muṇḍa* については, 阪本 (後藤) 2014 参照.
- 13 阪本 (後藤) (1994, 86) が 「sattra の場合は śikhā 除去を特記」するいくつかのテキストを紹介している.
- 14 Mitchiner (1982, 306–307) は, 天地を象徴する *skambhā* などとの同一性から, Saptarṣi との関係も指摘している。Saptarṣi が Agni や太陽, Prāṇa などと同一視されてきた経緯については, Mitchiner 1982, 249–294 参照.
- 15 Olivelle (1998, 525) はこの *pātra* について, “The dish that covers may refer to

- the conception of the sun as the door to the heavenly world” と述べている。
- 16 Olivelle (1998, 638) は、初期の神話において Mātariśvan が「火」と同一視されていたことを指摘している。
- 17 Mitchiner 1982, 288 参照。
- 18 MuU(Bh).3.2.10 における *ekarṣi* に関しては, Gupta (1995, 151) の “Ekarṣi symbolises the sun in the macrocosm and breath in the microcosm. To pour oblations into breath means to pour all thoughts into it. The reference to yogic practice is quite obvious here. To keep ablaze the fire in the head may puzzle the reader. It should not be confused with the crude practice of actually carrying the fire on the head. This Upaniṣad, with its antipathy to mechanical ritualism, cannot be supposed to lay store by any such practice. Those who know the secret of yoga can easily understand what the mantra is here referring to. When the fire that burns within in the form of kuṇḍalinī reaches the head, it should not be allowed to come down to the lower cakras, centres, the seats of desire, passion, egoism.” という指摘もある。
- 19 Hauer 1927, 310, Olivelle 1998, 636 参照。
- 20 Bodewitz 1973 参照。
- 21 Deussen (1897, 543) は, Prāṇāgnihotropaniṣad を Atharvaveda の “Reine Vedānta-Upaniṣad’s” (*Purely Vedāntic Upaniṣads* (1980, 567)) として分類している。
- 22 先述の AVParīś.49.4.10 参照。
- 23 Varenne (1960, 260) は *sarvāprayaścittiya* とし, 異読も示していないが, おそらく誤植であろう。
- 24 異読に *darśana* がある。
- 25 Prāṇāgnihotropaniṣad については, Deussen (1897, 612) の “Bemerkenswert ist, dafs Çaṅkara ad Brahmas. 3,3,24 (meine Übersetzung S. 582 fg.), wo er die Stellen Chând. 3,16—17 und Taitt. Ār. 10,64 bespricht, unsere Upaniṣad nicht erwähnt, sei es, dafs er dieselbe nicht kennt oder nicht anerkennt.” (It is remarkable that Śaṅkara to Brahmas. 3, 3, 24 (my translation p. 582 ff.) where he discusses the Chând. 3, 16-17 and the Taitt. Ār. 10.64 passages, does not mention our Upaniṣad, may be that he did not know it or did recognize

it. 〈1980, 646〉という指摘もある。しかし、後述する Śāṅkara の立場に基づくと、祭式行為の手順を説明する Prāṇāgnihotropaniṣad に意図的に言及しない場合も考慮されよう。

26 田中 2019, 83 参照。

27 剃髪がバラモン教で一般的でない点も、Muṇḍakopaniṣadbhāṣya が「剃髪の誓戒」と解釈しない原因の1つかもしれない。

28 Bodewitz 1973, 299ff., 伊澤 1996 参照。

29 Staal 1961, 73 参照。

30 Bodewitz (1973, 272) は PU.2.11 の「食者」や「食物の提供者」に着目しているが、それ以上の言及はない。